

不定名詞句の転位と状況解釈 La dislocation des syntagmes nominaux indéfinis et l'interprétation en situation

東郷 雄二 (TOGO, Yuji)

Cet article a pour but de mettre en lumière l'interprétation sémantique des syntagmes nominaux indéfinis (SNI) qui se trouvent disloqués en tête de phrase. Toutes les études existantes sur la dislocation s'accordent à reconnaître que seuls les SNI génériques peuvent être disloqués et que le pronom de reprise est toujours *ça/ce*. Cependant, on observe dans les corpus du français parlé un nombre non-négligeable d'exemples de dislocation des SNI qu'on ne peut pas considérer comme génériques. Nous avançons que la dislocation du type [des / du N - *ça/ce*] reçoit une interprétation générique à travers la quantification sur les situations. Les autres types de SNI disloqués doivent être interprétés comme indéfinis non-spécifiques. Pour étayer cette analyse nous avons avancé une série d'hypothèses sur le mécanisme d'interprétation des SNI faisant appel à la notion de situation et de monde possible.

キーワード：不定名詞句 (syntagmes nominaux indéfinis), 転位 (dislocation), 状況 (situations), 存在化閉包 (clôture existentielle), 総称 (générique)

1. はじめに

本稿では不定名詞句の転位を扱うが、左方転位のみを対象とし右方転位の例は参考に留める。転位された名詞句を「転位名詞句」、主節でそれを受ける代名詞を「照応代名詞」と呼ぶ。以下、転位名詞句はイタリック体で、照応代名詞はボールド体で表示する。

- (1) a. *Mon frère, il* habite à Toulouse. [左方転位]
b. **Il** habite à Toulouse, *mon frère*. [右方転位]

名詞句の転位に関する従来の研究では次の点が主張されており、ほぼ定説として受け入れられているのが現状である¹⁾。

(A) 転位できるのは、「定名詞句」と「総称解釈の不定名詞句」に限られる。総称解釈以外の不定名詞句は転位できない。

- (2) a. **Un homme, il* prend la main de l'enfant.
b. **Cinq soldats, ils* tombèrent dans une embuscade.

c. **Quelques hommes, ils* lui viennent en aide. (Corblin 1979)

(B) 転位名詞句が総称解釈の不定名詞句のとき，照応代名詞は *ça* (cela) であり，*il / elle* は用いることができない。

- (3) a. *Un enfant, ça* se met en crèche.
b. **Un enfant, il* se met en crèche.

この制約に関しては，談話・機能文法から代表的な説明が提案されている²⁾。転位名詞句は主節に対して「主題」(thème)として働くが，主題は談話的に既知であり旧情報でなくてはならないという説明である。定名詞句と総称解釈の不定名詞句は旧情報を表わすが，総称解釈以外の不定名詞句は新情報を表わす。だから後者は転位できないとされる。

ところが通説に反して，総称解釈ではない不定名詞句の転位例は頻繁に観察される。Blasco-Dulbecco (1999) からいくつか引用してみよう。

- (4) a. un mec qui *un mec qui fait deux ans de psycho ou deux ans d'anglais* bon **il** ne débouche sur rien
b. *des journaux qui viennent du Portugal* il y **en** a pratiquement pas
c. *de la terre de goudes* **ça** vaut vingt quatre mille francs le mètre cube
d. en cette saison, *des voitures étrangères au village*, **ça** n'existe pas

(4) a. では un mec ... が *il* で照応されており，仮に un mec ... が総称だと仮定しても上記(B)に違反する。(4) b, (4) c, (4) d. では，総称解釈がもともと存在しないとされている限定詞 *des / du* が用いられており，これも上記の定説(A) (B)では説明することができない。本稿ではこのように定説に合致しない名詞句の転位例を中心に考察し，これらの事例をどのように説明できるかを探求すると同時に，一般に文中で名詞句の意味解釈が決定されるメカニズムを併せて考察することを目的とする。

2. 「主題 = 定」説の再検討

問題の検討に入る前に，「主題は旧情報であり定・総称でなくてはならない」という定説とは異なる分析を示した研究を見ておこう。

まず Muller (1999) の「卓立説」である。Muller は，転位構文で主題になれるかどうかは，定（形態的基準）や既知（語用論的基準）という特性によって決まるのではなく，発話文脈で当該の名詞句の指示対象が，アクセスできるほどに「卓立」(saillant) しているかどうかという認知的基準で決まると主張した。次の例では，(5) a. には卓立がないため非文となるが，(5) b. では同一語句の反復という意味で卓立があり，(5) c. では un bus : une voiture という語彙的対比により卓立が生まれるとされる。

- (5) a. Où puis-je accrocher mon manteau ? — **Un porte-manteau*, vous **en** avez un là-bas.
 b. Où pourrais-je trouver un porte-manteau ? — *Un porte-manteau*, vous **en** avez un là-bas.
 c. J'ai un long trajet à faire tous les matins, et le bus me fatigue... — Et *une voiture*, tu **y** penses ?

Ward & Prince (1991) は英語の主題化構文について、「半順序集合」という概念に基づく制約を提案した。半順序集合の数学的定義は紙幅の都合で省略するが、次の4つの関係がこの定義を満足する。(i) IS-A-MEMBER-OF relation (例 (6) a) , (ii) IS-PART-OF relation (例 (6) b.) , (iii) IS-A-SUBTYPE-OF relation (例 (6) c.) , (iv) IS-EQUAL-TO relation である。

- (6) a. The fast buck, your tips. *The first ten-dollar bill that I got as a tip*, a Viking guy gave to me.
 b. There are a couple of nice points in there. *One point* I can say something about. The other I'm not sure.
 c. Stewardess are impressed only by name people. But *a normal millionaire that you don't know* you're not impressed about.

しかし Muller の卓立説でも Ward & Prince の半順序集合説でも、次の例がなぜ非文になるかを説明することができない。

- (7) a. Pierre a un fils et trois filles. Le fils travaille à l'étranger et deux filles sont mariées.
 Mais une fille*, **elle vit encore avec ses parents.
 b. Où pourrais-je trouver un porte-manteau ? — **Un porte-manteau*, **il** est derrière le comptoir.

(7) a. では先行文脈で un fils et trois filles が導入済みである。だから卓立は確保されており、また une fille は trois filles の一部なので半順序集合関係も成り立つが、予想に反して非文である。また (7) b. では un porte-manteau という先行文脈と同一名詞句が転位されている。この場合も卓立も半順序集合関係も成り立つが転位できない。したがって、卓立説と半順序集合説にはデータを正しく説明できないという欠陥があることになる。

3. 不定名詞句の意味解釈と定位操作

本稿では不定名詞句の意味解釈が問題となるので、ここで一旦転位現象を離れ、一般に不定名詞句の意味解釈がどのように決定されるかを考察する。東郷 (2002) では次のような仮説を提案し、名詞句の指示対象の談話世界への「定位」を次のように定義した。

【仮説 1】

不定名詞句は、 $s [\ x (N (x,s) \ P (...x...s...))]$ の操作を受けるときに、談話世界に定位される。不定名詞句の変数 s と x は、述語 P の存在化閉包 (existential closure) に含まれなくてはならない。ただし、 N は名詞述語、 s は時空変数、 P は

局面レベル述語とする。

この操作によって談話世界に定位されたとき，不定名詞句は特定解釈を受ける．一例を挙げて論理式で表現すると次のようになる．

$J'ai\ achet\acute{e}\ un\ livre.\quad s\ [\ x\ (livre\ (x,\ s)\ \ acheter\ (je,\ x,\ s))]$

仮説 1 で述べたように，不定名詞句の定位操作に必須の存在化閉包を設定するのは述語である³⁾．この例では *J'ai achet * という述語が過去形で断定されることにより，過去のある時点に *s* により時空間が設定され，「私が本を買う」という出来事がこの時空間のなかで生じたことになる．*x* は通常不定名詞句の表現に用いられる存在量化だが，これが *s* に従属している点に注意されたい．これは不定名詞句の指示対象の存在が，*s* で表わされる時空間に生じた出来事に従属していることを表わしている．

これを踏まえて転位と存在化閉包の関係について次の仮説を提案する⁴⁾．

【仮説 2】

転位位置は主節述語の述定作用の射程外であるため，転位名詞句は主節述語の設定する存在化閉包に含まれない．

この仮説は次の例で確かめることができる (Ronat 1979) ．

- (8) a. Pierre n'a pas encore rencontr  *tous ces gar ons*.
i) Pierre n'a rencontr  aucun de ces gar ons.
 $x\ (gar on\ (x)\ \neg\ rencontrer\ (Pierre,\ x))$
ii) Pierre n'en a rencontr  que quelques-uns.
 $\neg\ x\ (gar on\ (x)\ \ rencontrer\ (Pierre,\ x))$
b. Pierre ne les a pas encore rencontr s, *tous ces gar ons*.
Pierre n'a rencontr  aucun de ces gar ons.
 $x\ (gar on\ (x)\ \neg\ rencontrer\ (Pierre,\ x))$

(8) a. にはふたつ解釈がある．全称量化子が否定に対して広いスコープをとる解釈 i) と，狭いスコープをとる解釈 ii) である．i) は全否定，ii) は部分否定になる．しかし，*tous ces gar ons* が転位されている (8) b. には解釈が一つしかなく，全称量化子は常に否定よりも広いスコープをとる．フランス語の否定は VP 否定であり，主節動詞の述定操作に随伴する．転位された全称量化表現が主節述語の否定演算子に対して常に広いスコープをとるということは，主節述語に随伴する演算操作が転位位置にまで及ばないことを意味する．この場合，転位された *tous ces gar ons* の存在言明は，先行談話において既に確立していなくてはならないのである．

4. 転位不定名詞句と特定解釈

すでに見たように，転位された不定名詞句の意味解釈については諸説があるが，一致しているのは「特定解釈はできない」という点である．次の例では主節述語は特定の出来事

を言明しており，転位不定名詞句に特定解釈を要請するが，この解釈は阻止される．

- (9) a. **Un garçon, il* attendait devant la porte.
b. **Un enfant, il* a traversé la pelouse.
c. **Un porte-manteau, il* est derrière le comptoir.

「特定解釈不定名詞句は転位できない」とされることがあるがそれは正しくない．次例が示すように、母集合の存在と量化詞 *certain* の意味によって転位名詞句が特定解釈できれば逆に転位できるからである．

- (10) *On avait transformé les gares qui la desservent en dépôts ou en cafés. Certaines, on les* avait laissées intactes. (Larsson 1979)

ここでは次のように考えたい．**Un enfant, il* a traversé la pelouse.を例にとると，*un enfant* と *il* とは照応関係にあるので同一指示である．*il* は主節においては特定解釈を要請される．しかし前節で述べたように転位された *un enfant* は主節述定の射程外にあり，主節述語の設定する存在化閉包に含まれない．このため特定解釈ができず，*il* に要請される特定解釈とミスマッチを引き起こして非文になるのである．これを次式で表現する．*chien* (*x*, *s*) は主節述語の存在化閉包 *s y* の左にあり，変数 *x* と *s* は束縛されず非文になる⁵⁾．

- (11) **Un chien, il* a attrapé une souris.
chien (*x*, *s*) *s* [*y* (*souris* (*y*, *s*) *attraper* (*il*, *y*, *s*)]

5. *des N / du N* の転位

5.1. *des N / du N* *ça / ce* 型

ここから不定名詞句の転位構文の具体的分析に入る．いくつかタイプ分けして，まず *des N / du N* *ça / ce* 型の転位から検討する．

- (12) a. *de la terre de goudes ça* vaut vingt quatre mille francs le mètre cube
b. En cette saison, *des voitures étrangères au village, ça* n'existe pas.
c. *De l'argent* c'est toujours utile.

このタイプについては森・東郷 (2004) で，転位された *des N / du N* を例外的総称解釈と見なす可能性を指摘した．この主張は次の事実により傍証される．総称文の主語が *beaucoup de*, *plusieurs*, *quelques* などによって量化されるとサブクラス解釈になる (Léard 1987) ．

- (13) a. *Beaucoup d'arbres* attirent des insectes.
= "Il y a beaucoup d'espèces d'arbre qui attirent des insectes."
b. *Deux arbres* attirent des insectes.
= "Il y a deux espèces d'arbre qui attirent des insectes."

属性 attirer des insectes は主語に対して分配的に適用される．ところが左方転位されるとサブクラス解釈が不可能になり，述語は分配的に適用されなくなる．

- (14) a. Beaucoup d'arbres, ça attire des insectes.
= "Quand il y a beaucoup d'arbres, ça attire des insectes."
b. Deux arbres, ça attire des insectes.
= "Quand il y a deux arbres, ça attire des insectes."

Léard は転位された beaucoup d'arbres は "classe d'objets"を指すのではなく，"classe de situations" を指すと述べており，本稿でもこの説を採用する．転位された beaucoup d'arbres は「たくさん木」という個体の集合ではなく，「たくさん木がある状況」の集合を表わしていると思えるのである．森・東郷 (2004) では総称解釈は個体の量化だけでなく，状況の量化によっても得られることを次の式を用いて示した．

- (15) De l'argent, c'est toujours utile.
GEN [s x [argent (x) in s] [s x [argent (x) in s être-utile (x, s)]

GEN は総称演算子，制限部は「お金がある状況の集合」を，核作用域は「お金があり便利である状況の集合」を表わす．上式はその二つの集合が常に等しいことを表わしている．よって des N / du N ça / ce 型転位の不定名詞句は，本来なら総称解釈できない des / du という限定詞があるにもかかわらず，例外的に総称解釈されることができると考えることができる．

5.2. des N / du N en 型

会話コーパスにとりわけ多く観察されるのが，des N / du N en 型の転位である．このタイプは des N / du N ça / ce 型とは異なり，主節は総称・習慣文ではなく特定の出来事を表すのが通例である．

- (16) a. *des journaux qui viennent du Portugal* il y **en** a pratiquement pas
b. *des cabines téléphoniques* vous **en** avez pas beaucoup sur la place
c. *de l'argent*, elle **en** possède, cela se voit

このタイプの転位構文がどのような文脈・状況で用いられているかを、Provence 大学の会話コーパスの例で見てみよう．

- (17) [自宅の改築の相談のなかで柱が話題になっている]

L2 : hé les piliers il faut qu'ils soient plus grands.

L1 : oui ben tout ça c'est lui qui m'avait dessiné [....]

L2 : ah mais je comprends alors donc moi j'ai prévu si vous voulez le pilier en pierre la même chose que ça hé

L1: voilà bon d'accord oui

L2 : parce que des *des piliers préfabriqués* on **en** trouve pas de cette grandeur hé

(18) [手近にある紙切れに図面を書こうとするがうまくいかない]

L2 : je vais prendre autre chose

L1 : bon d'accord oui - celle-là là te

L2 : non non attendez on va prendre

L1 : j'**en** ai *du papier* je veux dire

(17) では改築の相談で *les piliers* が話題の中心となり, L2 は「プレハブの柱はこの大きさのものが無い」と述べている. ここでは「プレハブの柱」というクラス一般について属性を述べようとしているのではなく, 「プレハブの柱を探してもこの大きさのが見つからない」と言いたいのである. 従って問題の転位文は "même si / quand on cherche des piliers préfabriqués on en trouve pas de cette grandeur" と書き換えることができる. 同じく(18) では L2 が何か書くための紙を探していることが明らかで, L1 は「紙なら持っているよ」と述べているのだから, "Si tu cherches du papier, j'en ai." と書き換えられる.

森・東郷 (2004) では *Des lions blessés sont vulnérables.* 型の *des N* 総称文について, 次のような分析を提案した.

GEN [s x [blessé (x, s) lion (x)] [s x [blessé (x, s) lion (x) vulnérable (x, s)]]
des N の修飾語 *blessés* が制限部に入り状況項 *s* を導入するので, *Des lions, quand ils sont blessés, ils sont vulnérables.* という意味になる. つまりこれは個体のライオンのクラスについての総称ではなく, 「ライオンが傷ついている状況」のクラスについての総称である.

des N / du N en 型の転位についても同じことが言える. ここでは *des N / du N* という個体の集合が考慮の対象となっているのではなく, 「*des N / du N*を何かする状況」が考慮されていると考えるのである. これを次の式で表わすことにする.

(19) *Des cabines téléphoniques, vous en avez pas beaucoup sur la place*

s x [cabine-téléphonique (x, s) P (x, s)] vous en avez pas beaucoup sur la place

上の式で *P* は発話状況から語用論的に構築される述語を表わす. 例では *chercher* が *P* に該当するので, (19) の前件は *si tu cherches des cabines téléphoniques* と同じことになる. 転位された *des N / du N* の一般形は, s x [N (x, s) P (x, s)] となるが, これは仮説 1 によれば不定名詞句が定位を受ける場合の式なので, このままだと *N* は特定解釈されてしまう. これを阻止するため次の仮説を提案したい.

【仮説 3】

転位位置は「状況」を導入することができ, *si / quand s x [N (x, s) P (x, s)]* と等しいため, *des N / du N* は特定解釈ではなく非特定解釈を受ける.

このように転位位置に「状況」を導入する必要性は, *des N / du N en* 型とは異なるタ

イブの転位構文についても独立に要請される。Muller (1987) は次の転位不定名詞句は総称ではなく非特定解釈だとする。総称と見なすことができないのは、文中に聞き手を示す *vous* があるのと未来時制のためである。

(20) *Un vélo, ça vous obligera à faire du sport.*

この例は、「自転車があったら / を買ったら / を借りたら、嫌でも運動しなくてはならなくなるさ」と訳するのが妥当である。ここでは *un vélo* は個体としての自転車ではなく、「自転車を P する状況」を表わすと考えることができる。また Blasco-Dulbecco (1999) は次のパラフレーズを示唆しているが、これも同じように状況が設定されていると考えられる。妥当な訳は「きれいな女の子だったら、君は見るだろ」となる。

(21) *Une jolie fille, tu la regardes.* = “*Quand une fille est jolie, tu la regardes.*”

一般に不定名詞句の非特定解釈は、モーダル演算子のスコープの中でのみ可能だとされている。次の例の *vouloir*, *chercher* はモーダル動詞で、不定名詞句はそのスコープ内にあるため、特定・非特定の両方の解釈ができる。c. の条件法, d. の疑問はモーダルであり, e. の条件節も同様で、不定名詞句はいずれも非特定解釈を受ける。

(22) a. *Je voudrais acheter une voiture.*

b. *Je cherche une secrétaire.* c. *Un accident aurait pu se produire.*

d. *Est-ce que tu as un stylo?*

e. *Si un étudiant vient me voir, je suis gêné.*

ところが転位位置はモーダルな環境ではないと一般に考えられている。モーダルな意味を生み出す演算子がどこにも存在しないからである。しかし Muller の示唆するように (20) の *un vélo* を非特定解釈としたり, Blasco-Dulbecco が提案する *quand* によるパラフレーズが可能になるためには、転位位置が何らかの理由でモーダル演算子のスコープ内にあると仮定しなくてはならない。Muller も Blasco-Dulbecco もこの点をまったく考慮していない。しかし本稿で提案したように、転位位置が独自に状況を導入し、語用論的に構築された述語 P が補填されると考えれば、転位された不定名詞句は結果的に { *quand / si ... un N* } と同じ意味を表わすことになり、非特定解釈を受けることを説明することができる。

6. *un N* の転位

6.1. *un N* *il* 型

次に *un N* の転位を取り上げる。すでに見たように、*un N* は総称解釈のときに限り転位することができ、照応代名詞は *ça* だとされている。ところが実際には照応代名詞が *il / elle* の例も観察される。

(23) a. *Un enfant, il vous fait ça en deux minutes.*

- b. *Un ouvrier, il* peut aujourd'hui aller à l'Université.
- c. *Une fermière, elle* doit s'endetter pour vivre.
- d. *Un mec qui fait deux ans de psycho ou deux ans d'anglais bon il* ne débouche sur rien.

「総称解釈の不定名詞句は指示代名詞 *ça* で照応する」という原則を堅持するならば、この例の不定名詞句は総称ではないと結論しなくてはならない。ではこの不定名詞句の解釈はどうか。

これらの例が5.2. 節で考察した *des N / du N en* 型と意味の上で異なるのは次の点である。 *des N / du N en* 型に属する *Des accidents sportifs, j'en* ai eu dans le passé. を例にとると、転位名詞句が状況を導入し、不定名詞句 *des accidents sportifs* は非特定解釈となるが、主節の照応代名詞 *en* はその内包のみを受け、主節は現実起きた出来事を表わしている。このように転位位置が { *quand / si ... un N* } とパラフレーズできる一種のモーダル環境を作っているにもかかわらず、主節が現実の出来事を表わすことが可能なのは、照応代名詞が同一指示的な *il, le, lui, etc.* ではなく先行詞の内包のみを受ける *en* だからである⁶⁾。

ところが (23) では照応代名詞は同一指示的であり、転位名詞句と主節とは「同じ世界」に属すると考えなくてはならない。この事実は Karttunen (1976) の次の例が示している。

- (24) a. You must write *a letter* to your parents and mail { **the letter / it** } right away.
- b. You must write *a letter* to your parents. *They are expecting { **the letter / it** }.

(24) a. ではモーダル動詞 *must* の開く世界が文末まで続いているため、*a letter* は同一指示的な *the letter / it* で照応することができる。ところが (24) b. では *must* のスコープは第一文の終わりまでで、第二文は現実世界のことを述べている。第一文と第二文とは異なる「世界」に属するため、同一指示的代名詞で照応することができない⁷⁾。

さてここでもう一度 (23) の転位例を見てみると、(23) b. の *pouvoir*、(23) c. の *devoir* はモーダル動詞であり、(23) a. (23) d. は表層にモーダル動詞はないものの「必然性」というモーダルの意味が濃厚である。この事実を踏まえてここでは次の仮説を提案したい。

【仮説 4】

un N il 型転位の *un N* は総称解釈ではなく非特定解釈である。*un N* 自体の意味は [*s x [N(x, s) P(x, s)]*] であり、これがモーダルな仮想スペースに置かれることにより非特定解釈が生じる。

仮説 4 の意味するところは、Muller (1999) が挙げる次の例がよく示している。

- (25) Il passait en revue les cadeaux qu'il pourrait lui offrir pour son anniversaire : *une décapotable, elle* serait vite esquinquée ou volée dans ce quartier ... *un diamant, il* ne serait pas apprécié à sa juste valeur .. *des vacances au soleil, elle leur* préférerait le ski.

この例の *une décapotable, elle* serait vite volée dans ce quartier は、Si { *c'était / je lui offrais* }

une décapotable, elle serait vite volée dans ce quartier 「コンバーチブルだと / だったら , この
境界ではすぐに盗まれてしまうだろう」とパラフレーズすることができ , 文全体のモーダ
ルの意味は明らかである . 次の書き換え例が示すように , 発話全体が現実モードの場合は
un N — il は許容されない .

- (26) Il avait en tort de lui faire ce cadeau. **Une décapotable, elle* avait été volée quelques jours
seulement après les premières promenades dans le quartier.

ここで提案した仮説 4 の妥当性は , 会話コーパスに生じる転位例によっても傍証される .
un N — il 型の転位は , un N と il の間に quand / si 節を挟むものが多く観察される . この
quand / si 節は仮説 4 で提案したモーダルなスペースを条件節という形で明示的に示してい
るものと見なすことができる⁸⁾ .

- (27) a. mais *une femme* quand **elle** rentre de son travail he qu'est-ce qu'**elle** fait **elle** dort
b. *Un noble*, s'**il** vit chez lui dans sa province, **il** vit libre.
c. non *un cheval* en principe quand **il** a la tête en c'est c'est pour sentir la merde pour manger
il a toujours le museau devant.
d. *un professeur de Bonn et d'Iena*, lors même qu'**il** se sert du terme le plus abstrait, **il** peut y
trouver toute l'évolution de la race allemande.

6.2. Muller (1999) の例文について

Muller (1999) の例 (5) のような un N — en の転位は筆者が参照した会話コーパスでは見あ
たらなかった . しかしこれについても仮説 3 を適用して説明することができる . (5) a. の容
認度の低さは , 当該の文脈では si / quand s x [N (x, s) P (x, s)] に相当する状況を構築
することが難しいためである . 「コートはどこに掛けたらいいでしょう」「コート掛けを
探しているのならあそこにありますよ」というのは日本語では一見問題ないようだが , そ
こには語用論的飛躍があると考えられる .

6.3. un N ça 型との比較

最後に un N ça 型の転位と un N il 型の転位を比較してみよう . 総称の un N の場合は
照応代名詞は ça であり , 指示的名詞句を受ける il と対比をなす . ところが次例のように総
称的不定名詞句でも quand 節を間に挟むと il で照応できると言われてきた .

- (28) *Un chien*, quand on l'attaque, **il** se défend. (Culioli, cité dans Furukawa 1989)

この現象について Furukawa (1989) は , 総称の un N は "potentiellement référentiel " であり ,
quand 節などによって spécification / détermination が加わると il による照応が可能になると
説明している . また井元 (1991) は同じ例について次のように述べている .

他の要因により『発話内世界』の解釈を「総称スペース」とするのが自然な発話では ,

ça による左方転位構文の容認度は低く，むしろILが普通になる．(...) quand on ... の節の付加により，眼前描写文解釈を消し，一定の条件下における総称スペース解釈を得るので IL のみが可能となり，ça が用いられなくなるのである．(井元 1991)

このように，Furukawa (1989) も井元 (1991) も (28) の un chien を総称だとしているが，前節での議論からもわかるように，これは総称ではなく非特定解釈と見なすべきである．そもそも総称とは，名詞 N の表わすクラス全体について常に真である命題をいう．だから，「...の時には」のような限定が加わった場合は常に真であることにはならず，それはもはや総称ではないと考えるべきである．

従って本稿では，「総称的不定名詞句は ça で照応する」という従来の説は正しいと考える．一方，例外的に il で照応するとされた例は総称ではなく，非特定解釈の不定名詞句だと結論することができる．

6. おわりに

本稿では転位不定名詞句に関して，次の点を主張した．

- (A) 転位不定名詞句を特定解釈できないのは，主節述語が設定する存在化閉包に含まれないためである．
- (B) des N / du N ça / ce 型で，転位名詞句は状況の量化により例外的総称解釈を受ける．
- (C) des N / du N en 型で，転位名詞句は語用論的に補填された述語が開く存在化閉包のなかで非特定解釈を受ける．
- (D) un N il 型で，転位名詞句はモーダルな世界の中で非特定解釈を受ける．

結論的には，des N / du N ça / ce 型のみが例外的総称解釈で，残りの転位不定名詞句はすべて非特定解釈すべきだということになる．

また本稿で提案した重要な主張は，「転位位置がそれ自身で状況やモーダルなスペースを導入する」という仮説である．現在の段階ではこの主張は仮説に留まっている．しかし，Keenan & Schiefflin (1976) が指摘するように，左方転位構文は文と言うよりは一つの談話としての性格を持つこと，Erteschik-Shir (1997) が提案しているように，主題の一類型として stage topic という概念を設定でき，これは「状況」に通じること，Haiman (1978) が指摘しているように条件節が主節に対して主題として働くのならば，逆に主題は条件節と等しい価値を持つと考えられること，などの諸点を勘案すると，本稿の主張には十分な根拠がある．しかしこの点についてはさらに考察を深めることが必要である． (京都大学)

【注】

- 1) 転位構文の研究は数多くあるためここで列挙することはできないが，代表的な研究である Lambrecht (1981) や Blasco-Dulbecco (1999) などを始めとして，大多数はこの通説を採用している．
- 2) たとえば久野 (1973) や Attal (1976) を参照のこと．
- 3) 存在化閉包を設定するのが主節述語だと仮定すると，Un chien est entré. Il s'est assis sous la table. の un chien il の照応現象が説明できないという古典的問題が生じるという批判が予想される．第一文の存在化閉包の作用域は第一文の終わりまでであり，第二文はま

た別の存在化閉包を設定するため， un chien と il の同一指示関係が確保できないからである．この難点は un chien の指示対象の変項から定項へのアップデートを仮定することで回避できると考えているが，本稿ではこの問題には直接触れない．また， Erteschik-Shir (1997) は存在化閉包の設定は主節の持つ焦点効果によるという説を提案しているが，結果的に本稿の主張と同じことになる．

- 4) Furukawa (1996) が主節の *apport sémantique* が転位位置にまで及ばないことを指摘しているのは，仮説 2 と同じことを言っていると見なすことができる．
- 5) Heim (1982) のように，最後まで束縛されずに残った不定名詞句はテクストレベルの存在化閉包によって自動的に束縛されると仮定すると，(11) の un chien も束縛されて解釈を受け適格な文になってしまう．ここでは存在化閉包の設定には出来事を表わす述語が必要であり，転位位置は述語を欠くために存在化閉包を設定することができないと考えておく．
- 6) 従って des N / du N en 型の転位構文は， Heim らが問題にしている dynamic binding とは関係ないということになる．
- 7) ここで言う「世界」とはメンタル・スペース理論で言うスペースのことと考えてよい．
- 8) 査読者の一人から (3) b. の例 *Un enfant, il se met en crèche. がなぜ容認されないかを説明すべきという意見が寄せられた．紙幅の関係で詳述はできないが、文全体の意味がモーダルな仮想スペースを構築するに足る情報たりえているかどうかが決め手になると考えられる．

【参考文献】

- Attal, P. (1976), "A propos de l'indéfini «des» : problèmes de représentation sémantique", *Le français moderne* 2, 126-142.
- Blasco-Dulbecco, M. (1999), *Les dislocations en français contemporain*, Champion.
- Corblin, F. (1979), "Sur le rapport phrase-texte. Un exemple : l'emphase", *Le français moderne* 47, 17-34.
- Erteschik-Shir, N. (1997), *The Dynamics of Focus Structure*, Cambridge University Press.
- Furukawa, N. (1989), "Les SN génériques et les pronoms ça / ils. Sur le statut référentiel des SN génériques", *Modèles linguistiques* 11, 37-57.
- Furukawa, N. (1996), *Grammaire de la prédication seconde*, Duculot.
- Furukawa, N. (2003), "Les éléments initiaux détachés et la thématisation", *Cahiers de praxématique* 40, 127-148.
- Haiman, J. (1978), "Conditionals are topics", *Language* 54, 564-589.
- Heim, I. (1982), *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Ph. Thesis, University of Massachusetts.
- Karttunen, L. (1976), "Discourse referents", J. McCawley (ed) *Notes from the linguistic underground* (Syntax and Semantics 7), Academic Press.
- Keenan, E.O. & Schieffelin, B. (1976), "Foregrounding referents : a reconsideration of left dislocation in discourse", *BLS* 2, 240-257.
- Lambrecht, K. (1981), *Topic, Antitopic and Verb Agreement in Non-Standard French*, J. Benjamins.

- Larsson, E. (1979), *La dislocation en français : Etude de syntaxe générative*, Lund, CWK Gleerup.
- Léard, J.-M. (1987), "Quelques aspects morpho-syntaxiques des syntagmes et des phrases génériques", G.Kleiber (ed) *Rencontre(s) avec la généricité*, Klincksieck, 133-156.
- Muller, Ch. (1987), "A propos de l'indéfini générique", G.Kleiber (ed) *Rencontre(s) avec la généricité*, Klincksieck, 297-234.
- Muller, Ch. (1999), "La thématization des indéfinis en français : un paradoxe apparent", C.Guimier (ed) *La thématization dans les langues*, Peeter Lang. 185-199.
- Ronat, M. (1979), "Pronoms topiques et pronoms distinctifs", *Langue française* 44, 106-128.
- Ward, G. L. & E. F. Prince (1991), "On the topicalization of indefinite NPs" , *Journal of Pragmatics* 16, 167-177.
- 井元秀剛 (1991) 「人称代名詞ILの指示対象 主にCEとの対比において」, 『仏語仏文学研究』(東京大学仏語仏文学研究会) 7, 117-141.
- 久野すすむ (1973) 『日本文法研究』大修館.
- 東郷雄二 (2002) 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」 『京都大学総合人間学部紀要』 9、1-18.
- 森香奈絵、東郷雄二 (2004) 「des N 主語を持つ総称文と状況量化」 『フランス語学研究』 38, 39-45.